

# 幸せの青い鳥はどこに～あなたの欲しかったものは何ですか？

## 第1回：はじめに

～「どうして、青い鳥が欲しいの？」とチルチルが聞きました。

「幸せになるためだよ。青い鳥を見つければ、必ず幸せになれるんだ。」と魔法使いが答えました。～

このページでは、2年前の10月から「自然と人間の共生～21世紀への道」を6回シリーズで、1年前からは「ODAとNGOの連携～より効果的な国際協力を目指して」というシリーズを連載した。2つのシリーズは一見無関係のように見えるが、実は「我々はいったい何をめざして生きているのか」あるいは「持続可能な開発とは何か」という点でつながっているテーマである。今回のシリーズ「幸せの青い鳥はどこに」は、まさに今、我々がめざしているものを探る「旅」になる、そんな予感を持ってこの新しいシリーズを始めようとしている。これら三シリーズはたまたま「三部作」になろうとしているが、それはどこかでそうなる「必然性」があったのかもしれない……

さて、このシリーズの中では、「豊かさ」とか「夢」が重要なキーワードになるだろう。さらに本シリーズでは、日本や日本人の現在と将来、こどもの未来、教育、ということも重要なテーマとなるだろう。我々、国際耕種のメンバーは国際協力の仕事に携わっているので、日本と途上国両方を体験する機会を与えられているが、現在の日本を見ているといろいろなことを考えさせられる。たとえば、経済的にあるいは物質的に豊かになることは、それと引き換えに「心の豊かさ」を失うことなのか？、それが「幸せになること」の実態なのか？（そしてそれは途上国でも同じなのか？）。だとすれば、我々は何のために「豊かさ」を求めているのか？、我々はわざわざ不幸になるためにこれまで努力してきたのか？等々……

ところで、「豊かさ」とは何か？ 逆に「貧しさ」とは何だろうか？ 「貧しさ」を表す尺度としてドナー側は「貧困指標」という指数を使うことがある。それは、家計収入、カロリー消費量、病院や学校の数、農村電化率、トイレの普及率、識字率、等々であるが、実は「貧しさ」は物質的な尺度では測れないのではないかと我々がイキイキと豊かに生きていくためには「夢」を持つことが必要である。始めから夢や希望を持たない人はいないだろう。しかし、その夢を持ち続けることができなくなった時、あるいは夢を現実にするステップが見つからない時、人は絶望のフチに立たされるのではないかと。そういう意味から、「貧しさ」とは生きることの夢や希望を持つことが難しい状態である、と言える。

そして、そんな時に必要なのは、自分（庶民）に無関係な、遠大で抽象的な「将来の計画」ではなく、とりあえず到達可能な目標と、それを実現するための「自助努力と支援」であろう。まず、具体的な目標が持てて、その目標に向かって自ら努力してよりよく生きようとする行動が始められること、そして、そんなふうにながらんでいる人たちに対する、正しい、適確な支援がまわりからされる時に、人は生きる希望の光を見出すことができるのではないかと。また、「支援」が永遠に続くのではなく、いずれは将来に向けて「自立」すること、を念頭においた支援であるべきだろう。

さて、その「夢」とか「希望」の実態は何なのか？ このシリーズは、そんな夢探しの旅へのいざないである……

～「この国には何でもある。だが希望だけがない。」

（希望の国のエクソダス・村上龍）～



## 第2回： WTO と市場経済

～「ここには、ありとあらゆる幸福があります。お金を持っている幸福、なまけて遊ぶ幸福、お腹がすかないのに食べる幸福、のどがかわいてもいらないのに飲む幸福、誰かをいじめて楽しむ幸福...」

「そんなのはみんな、幸福じゃないよ！」、「そんなのが幸福なら、わたしは欲しくないわ！」～

貧しさの指標のひとつとしてお金、そしてモノが取り上げられることが多い。そのお金＝貨幣経済を世界に組込んでモノの動きを操作しようとしているのが WTO システムである(WTO の概要は 4 ページ参照)。果たして、それはどのようなもので、どのような影響を与えているのか？ それは我々に「夢」や「希望」や「幸せ」をもたらしてくれるものなのだろうか？ WTO の前身、GATT の時代にも貿易の自由化をめざしていたが、農産物は除外されていた。気候風土に影響される農業生産は、国ごとに異なる条件を抱えており、工業のように同じモノサシでは計れないため、比較生産費理論(生産費が相対的に低い物を自国内で生産し、他は輸入した方が有利)が適用されにくかったからである。しかし、80 年代の世界的な農産物過剰を背景にして、これまで「聖域」だった農業分野も自由化させようという動きが、農業生産力に恵まれた農産物輸出国を中心に起きてきた。世界中の農産物市場を一体化して考え、効率的生産をする国に供給を任せるのがグローバル的思考(=実はアメリカン・スタンダード)から好ましい、という理屈である。

途上国では、いやがおうでも先進国から売りつけられる大量の消費資材が入ってくる。電化製品、自動車、服飾品等々... 人々は、魅力的に見えるそれらを欲しいと思うのだ。でも買うには、お金が必要だ。だから、現金収入の道を探らなければならない。だから、日々の生活を第一次産業に頼って暮らしている途上国の人々は、これまでの生活パターン(=自給自足)を壊しても、環境を破壊しても、商品作物を作りたがる。お金を手に入れるために...

一方、売りつける当事者の一人である我々日本においては、関税化によってコメを除く安い農産物が大量に入ってくるようになってきた。しかし、高コスト・高賃金そのまま商品の価格に跳ね返る日本の農家が作る作物は国際的な価格競争力はないのが現状である。安い農産物が輸入され、市場に出回ると、日本の農家は太刀打ちできず、収入は減り、あげくには農業を捨てる農家も出てくるし、実際出てきている。結果として、管理できない農地が増え、農地が捨てられることによって農地が疲弊し、農地のもつ環境調整能力が無視される。また途上国においても、「国際化」、「市場経済化」という名のもとに地域の独自性が壊され、農地が荒れていき、しかし一方で人々の暮らしは必ずしも「豊か」にはならない。

こう考えると、WTO の枠にはまるということは、例えば先進諸国のように利益を得る人々がいる反面、貿易の自由化という名のもとに途上国において犠牲を強いられる人々がいるのが現状である。また、WTO システムによって地域の独自性、伝統性が無視され、世界的な均一化の中にはめ込まれるおそれがある。WTO のシステムでは貿易拡大のための開発による環境破壊阻止の重要性が叫ばれているものの、現存する農地の環境保持能力を維持することに配慮しているかは疑問である。



例えば WTO によると、乱開発はいけないと、新規開発に対しての環境配慮はあるものの、既成の水田の水資源涵養能力等の能力に関しては評価されていない。従って、最近特に重視されてきている「持続可能性」「環境保全型農業」「適正規模」「地域独自性」といったようなキーワードを掲げる農村開発や地域開発においては、WTO の考え方とは隔たりがある。もっと地域の特殊性や長期的な環境問題、環境資源を考慮した討議が行われるべきではないだろうか。

WTO によれば、「WTO は富者や権力者による独裁の道具である」とか、「WTO は雇用を破壊する」とか、「WTO は健康や環境や開発への関心を無視している」などの批判は、往々にしてWTO の機能に対する根本的な誤解に基づいているという。以下は、WTO が言うところの利益と誤解である。

#### WTO がもたらす 10 の利益

- 1 . 多角的貿易体制は平和の促進を助ける
- 2 . 紛争は建設的に取り扱われる
- 3 . 規律は人々の生活をより楽にする
- 4 . より自由な貿易は生活の費用を軽減させる
- 5 . 多角的貿易体制は製品の量と選択肢を増やす
- 6 . 貿易は所得を増加させる
- 7 . 貿易は経済成長を刺激する
- 8 . 基本原則は生活をより効率的にする
- 9 . 政府は政治的働きかけから守られる
- 10 . 多角的貿易体制は清廉な政府を育成する

#### WTO に対するよくある 10 の誤解

- 1 . WTO は政策を独裁する
- 2 . WTO は自由貿易至上主義である
- 3 . 開発より商業上の利益が優先される
- 4 . 環境より商業上の利益が優先される
- 5 . 健康や安全より商業上の利益が優先される
- 6 . WTO は雇用を破壊し貧困を悪化させる
- 7 . WTO では小国は無力である
- 8 . WTO は強力な圧力団体の道具である
- 9 . 弱国はWTO 加盟を強制される
- 10 . WTO は非民主的である

さて、WTO は本当に途上国の地域住民の生活向上に役立つのだろうか？ WTO の枠に入ることで単なる物質社会へ組込まれることのみが道筋にあるのではなからうか？ 途上国の人々が真の豊かさとともに生き残っていくためには、ほんとうに WTO が必要なのか？ 逆に、WTO の枠組みから離れて、「国際競争」をしないという選択肢が、実は「豊かさ」への近道ではないのか？

#### 世界貿易機関 (WTO : World Trade Organization) の概要

WTO は 1995 年に設立され、その前身は第二次世界大戦後に設立された GATT : 「関税と貿易に関する一般協定」である。GATT は確固とした法的根拠を持たず、常に暫定的な組織であったが、その下で多角的貿易体制が立ち上げられ今に至っている。その多角的貿易体制はモノの貿易から始まり、1947年から1994年まで GATT は、関税引き下げやその他の貿易障壁の削減について交渉を行う場であった。多角的貿易体制は、GATT の下で逐次開催されたラウンドと呼ばれる貿易交渉を経て発展し、初期のラウンドは主に関税引き下げを対象としていたが、その後交渉にはアンチ・ダンピングや非関税措置などの他分野も含まれるようになった。そして、1986年から94年に行われたウルグアイ・ラウンドはWTO の設立へ導き、WTO は GATT (モノの貿易) や「GATS : サービス貿易に関する一般協定」(サービスの貿易) などの協定を含め貿易問題全体をカバーする確固たる法的根拠をもった国際機関として、国家間貿易についての世界的なルールを扱う唯一の国際機関として設立され、現在 GATT の諸協定はWTO 協定の一部として存続している。

WTO の主な機能は、貿易が可能な限り円滑に予測可能に、自由に流れることを確保することである。その結果、消費者も生産者も彼らが用いる最終製品、部品、原材料及びサービスの確実な供給と、より広範な選択肢を享受できることになる。そして、生産者も輸出者も外国市場が開放され続けることを前提とし、WTO は、より希望に満ちた平和で予測可能な経済世界の実現を目指している。WTO での決定は、一般的に全加盟国のコンセンサスによりなされ、各加盟国の国会で批准される。また、貿易摩擦はWTO の紛争解決手続に移され、貿易紛争が政治的、軍事的紛争に拡大する危険を減らしている。

貿易障壁を削減することによりWTO の体制は、人々と国々間のその他の障壁も打破しようとしている。この体制は、前述した多角的貿易体制と呼ばれており、その中心がWTO 協定である。この協定は世界の大多数の貿易国により交渉、署名されて各国の国会で批准されたもので、国際的な商取引の法的な基本的ルールであり、基本的に加盟国の重要な貿易上の利益を保障する契約である。また、万人の利益のために各国の貿易政策を協定の範囲内にとどめるよう政府を拘束する。つまりその目的は、モノ及びサービスの生産者、輸出者、輸入者が営業活動を行うことを助けることにあって、についてはWTO の目標は加盟国の人々の福利厚生の上にある。

### 第3回： 農的地域生活向上と地場産業の育成

～「おじいちゃんの飼っている青い鳥を、ぼくに出来ない？」

「いいとも。でも、その鳥はもう、世の中の騒々しい暮らしに我慢し切れなくなっているから、どうなってもしらんよ。」～

急峻な地形を持つ日本では、農家一戸当り、また一筆当りの面積も小さく、自ずと生産価格も高くなる。一方、諸外国では広大な農地から単一作物生産により、大量・安価な農産物を作り出し、他国へ輸出している。日本の消費者もこのような海外からの安価な農産物を嗜好してきたが、近年の環境配慮、健康志向などの観点から、より安全性の高い農産物を望む方向へと向かっている。このような状況を先取りし、「有機農業」を取り入れ、農産物の付加価値を高めると共に、地域住民の健康増進、地域振興を行っている地域がある。



当時の町長は、林業の町であった綾で「林を切るな」と言って住民を驚かせたと聞いた。綾町は宮崎県中部にある人口7,000人程度の町。現在、人口の3割が農業に従事するこの町では、行政主導型で「自然生態系農業」を実践している。元々、町民、特に老人医療の健康増進を目的とした有機農法による一坪農園奨励から始まった園芸療法活動は、現在、有機農業開発センターの設立、町独自の有機農産物認証基準の設定、有機堆肥プラント建設、有機農産物の産直・市場出荷などに広がっている。さらに有機農業ばかりでなく、自然林の照葉樹林を観光資源に、また木工、染織、酒造など自然の糧を利用した地域振興策を展開しており、全国でも知られる町づくりと有機農業の融合化を図っている町である。

生活雑廃利用による肥料プラントからは有機堆肥が作られ、町のあちこちに認定証のある田畑が見受けられる。セスパニア、レンゲ等の緑肥混作、合鴨による田んぼでの除草が行われている。既に、農家の7割が有機農業に関係していると聞いている。一方、町はきれいに整備され、いたる所に施設所在を示す標識が立っている。街の中心地に置かれている有機農産物販売所横の池で町民が飲料水を汲み、販売所では有機農産物、田舎風食品の販売が行われている状況を見て、なぜか都会にはない生活の満足感を感じさせられる。

綾町の事例のように、地域の自然環境・独自性を生かし、住民の住環境改善に貢献できるシステムを作りながら、農産物に有機農業という付加価値を付け、消費者のニーズを先取りし、独自で販路を拡大してきたこのような取り組みは、国内外を問わず、今後の農村地域開発の一つの手本になる事例として取り上げることが出来よう。

海外からの安価な農産物の輸入は、多くの農地放棄をもたらし、ひいては農地・林地の持つ自然環境涵養能力を減退させ、農的地域生活向上を無視した方向に動いているのではないか。貨幣経済中心、生産性優先の経済効率だけで地球人の幸福が達成されるという考え方はあり得るのだろうか。



## 第4回：商品作物を作らない村

～ 「誰も、悪いことなんかしなかったわ。ただ一生懸命に、青い鳥を探しただけ……」 ～

いま、「地域」が直面している大きな問題の一つは、「自由化」という名のもとに大量生産や大量消費を推進する地球規模の経済システム(WTO)によって世界の隅々まで一元化されようとしていることである。地域の環境や資源に関わる問題としては、工業生産や食糧などの原材料である「資源」が「南」の農山漁村から都市へ、そして「北」の先進国へと運ばれ、農山漁村には「破壊された環境」が残される…。そうした世界規模での「物の移動」を是とする概念の対極にあるのが、「三里四方」で取れたものを食べるという、地域の物質循環を重視した考え方である。

また農業生産面では、これまで農業の近代化や経済的合理性のために、地域に根ざして行われていた伝統的な農業が、モノカルチャー的な商品作物栽培に転換させられてきている。こうした商品作物の栽培に伴って農業資材の投入がなされ、これは環境悪化につながるだけでなく、地域の自立や貧困の問題とも関係している。つまり、これまで地域の循環の中で自立的に農業をしてきた農民が、工業部門からの投入資材に頼らざるを得なくなり、自立性を失っていく。自立できない、従属関係に陥った状態は人々の「自主性」を奪うことになり、そのような状態はいかに物質的に恵まれていても、豊かであるとはいえない。さらに、地域における自然破壊が農業の持続性を失わせ、地域の人々の生活の存続そのものを脅かす…。

商品作物を作らない村がある。経済的や物質的な豊かさを求めて商品作物を導入したものの、それに伴って地力の低下、連作障害の発生、早魃などへの適応力の弱体化い等の原因で収量が極端に減ったり、国際競争にさらされて生産物の値段が低く抑えられたりと、必ずしも農民の収入向上には結びつかない。さらに利益追求するあまり、持続性や環境保全がないがしろにされ、開発のあとに荒廃した農地が残される。そういった反省の中から「売るための農業」はやめて、「生きるための農業」、自然の摂理を生かして地域内の循環の中で成り立つ農業をしようという動きが、タイやラオス等の農村で見られる。

それぞれの地域では、昔から受け継がれてきた固有の文化や知恵を生かして、それぞれの自然条件に適合する産物が生産されていた。こうした地域の特性を生かして、地域の人々が、地域の自然資源を地域のために保全し利用できる、地域循環型の資源管理を行い農村社会の内部の資源とエネルギーに依存しながら自立する、長期的かつ持続的な生活を営む。「商品作物を作らない村」ではこうした取組みが実践的に行われている。昔の自給自足経済に戻ろう、というのではない。現在の状況にふさわしい新しい形態や生き方の模索が必要である。そして、これは決して途上国だけの話ではない。



Copyright : 小学館

「だから、景気がいいっていうのもちょっと違うんだよね。じゃあ、暮らしが困ってるかということでもないんで・・・何て言うの、お金にはならないんだよね。でも、ちゃんと食ってはいけるわけさ。それが今までと違うところだよ。」  
～ 村上龍・「希望の国のエクソダス」～

## 第5回:何のために？そして、子供達の将来は？

～「しかえしだ！ しかえしだ！ しかえしだ！ 昔から、人間がわしらに対してやってきた悪いことへのしかえしだ！」～

「このプログラムは不正な処理を行ったため終了しました・・・」、「タイプ のエラーが起きました・・・」、こんなメッセージの他にも、突然のフリーズ、アプリケーション・ソフト間の相性の悪さ？等々、パソコンを使っているとさまざまな原因不明のエラーに戸惑う、といった経験はないだろうか？「道具」としてのパソコン、仕事を効率化させるためのパソコンだったはずなのに、いつのまにかパソコンの「お守り」をさせられ、パソコンに「使われている」人間たち・・・

何のための効率化？

ティーンエジャーによる連続殺人事件、両親殺害事件、バスジャック・・・。留まるところを知らない狂気の17歳による事件の数々。恐ろしいのは、このような事件が異常と感ぜられなくなっている現実。今、若者の間に何が起きているのか？こうしたことが起こる原因は、親？テレビゲーム？それとも暖衣飽食の社会？受験地獄とまで言われた教育システムから得られたものは・・・。我々が受けてきた教育は、どのような「良き次世代」を求めてきたのか？学校内では点を取る子供は良い子と言われ、学校生活と社会生活との接触の重要性は疎かにされ、物質的向上を目指す指導が行われてきた。家庭では父親不在、会話不在の中で成長していく子供たち。このような状況で、子供たちは物事を判断する能力を身につけることができるのか・・・

何のための教育？

「ゾウの時間、ネズミの時間」からの情報では、動物の寿命と心拍数を比較すると一生の間の心拍数はほぼ同じと言われている。つまり、「エネルギー消費」が大きい動物ほど「時間」が早く進む。現代の日本人は、生物として生きていくのに必要な量の約40倍ものエネルギーを消費しているという。つまり、エネルギーを浪費して老化を促進しているだけなのだろうか？最低限の食料さえ摂取できない人々が生きているこの地球上で、我々日本人のエネルギー浪費の向こう側に見えるものは・・・

何のためのエネルギー浪費？

文明の後には砂漠が残る、これは必然か？それとも、防げるのか？古代文明が栄えたエジプト、メソポタミア、インダス、黄河では、いったい何が起こったのか？有限の資源と無限の欲望の中で、グローバル化(人やモノ、情報の移動を完全に自由にし、地球規模で市場メカニズムを浸透させようとする)は本当に機能するのか？グローバル化は強者と弱者の格差拡大や環境破壊につながるだけではないのか・・・

何のためのグローバル化？

今、日本を覆っている「閉塞感」は、経済は成長し続けるという「成長神話」の崩壊、あるいは目標の喪失、といったものと無縁ではなからう。物質的な豊かさだけが目標だったのだろうか？いや、物質的な豊かさだけでは人間は幸せになれない、といわれてから久しい。しかし、現実はどうか？物質的な豊かさとは違う別の幸せはどこにあるのか？最近の地球温暖化防止会議で問題となっていた、温暖化ガスの削減手段のための京都議定書に対して「経済に与える悪影響」を理由にアメリカが離脱し、批准を見送った。日本では、10年来の不況にあえぎながら、「痛みを伴う構造改革」がしきりに叫ばれているが、その「痛み」の後、に想定されているものはやはり「既得権」としての物質的な豊かさを捨てきれない社会ではないのか？しかし、人類の果てしなき物質追求と自然の回復能力を遙かに越えた開発をこのまま続ければ、その行き着く先はある程度予想できよう。こうした中で、我々は次世代に対してどのような教育を行い、どのようなシステムを構築して行くべきかを本気で考える時が来ているのではないだろうか。



Copyright : 小学館

## 第6回:エピローグ

豊かさとは何か？ 生き生きとした人生とは？ 希望とは？ という問いかけから始まったこのシリーズも終わろうとしている。「いったい、何をめざすのか？(欲しいものは何か?)」という問いは、しかし、それほど簡単に答の出せるものではないし、またその答もたった一つではないだろう。ただ、そうしたことを考える時に、日本における現在の「閉塞感」は将来に夢が持てないことに関係しているし、その対極にあるものが、希望とか充実感、達成感といったものである。「閉塞感」は、これまでの「安定成長型」モデルやシステムが崩れたからだが、おそらくこれからは今まで我々がしてきたような、過去のモデルに頼ったり、既成品の物まねをすることだけではやっていけないのではないかと、したがって、これからは「創造性の時代」といってもいいだろう。ただ、それは何もなくても手に入れられるような簡単なものではなく、そのための努力や技術の習得、訓練が必要である。また、そうしたことを経由(経験)しないかぎり、充実感とか達成感は得られないのではないかと、それが「豊かに生きる」ための一つの必要条件となるだろう。

さて、「豊かさ」についてももう一度考えてみる。「ユニクロ」全盛時代である。安い、品質もそれなりに良い。不況、デフレ下のニッポンの現状にぴったり。ハンバーガーも牛丼も「安さで勝負」の時代である。でも、安ければそれでいいのか？「安さ」の裏側で何かとんでもないことが起こっていないか？ 製造業の「空洞化」も問題であるし、またユニクロに限らず、郊外量販店と地元商店街との競合関係はどうか？ 単に安ければいいのなら、顔見知りの〇〇さんがやっている衣料品店、電気屋さんとか八百屋さん、魚屋さん、薬屋さんもいらぬ。実際に地方都市の駅前商店街はだんだんさびれてきている。でも商店街があって、そこに住む人、買物に来る人たちがいて、街が成り立ってきていたはず。そういったものすべてを壊して、安さ第一、効率第一でいいのか？ こうした市場経済主義一辺倒の行き着く先は、ほんとうの「豊かさ」とか「潤い」とは対極的な世界ではないのだろうか？

さて、視点を変えて、「組織と個人」について考えてみる。市場経済の中で営利企業としての株式会社は、利益を追求して経済的に「成長」し続けなければいけないのだろう。しかし、お金には換えられないもの、たとえば使命感や充実感、達成感を追求する組織(たとえば NPO)もありうる。そういうことをめざすという意味では、NPOの方が営利企業より近い、あるいは有利と言えるが、その前に、「サラリーマンになる」ということ(「組織」に取り込まれ、「組織」に依存して生きていくこと)の意味を考える必要もある。つまり、NPOなら無条件で充実感や達成感が得られるのか、ということである。無論そうではなく、営利企業であれ、NPOであれ、(その組織内にとどまるかどうかに関わらず)組織に取り込まれることを排して組織からの自立をめざすこと、個人としての生き方を確立して組織に全面依存しない生き方をめざす、といったことは「豊かに生きる」と無関係ではない。充実して生きることができかどうかは、一人一人の個人の努力にかかっているのである。

「人間に与えられた最大の幸福は希望である。」という言葉があるように、どんなに辛いことがあっても、希望があれば耐えることができる。しかし、「希望」だけでは物事は動いていかない。それを実現させるための原動力となるのは「欲望」だろう。ただ、乱開発による環境破壊や行き過ぎた市場経済化によるひずみ等の例を出すまでもなく、欲望を野放しにすることは危険である。欲望をコントロールすることは難しいが、欲望に方向性をつけようとする努力は必要であろう。そこで求められるものは、おそらく「ミッション」とか使命感といったことだからである。こうした考え方は、「国際耕種」という組織の将来の方向性を考える上でも重要な示唆を与えてくれる。

さて、あなたの欲しいものは何ですか……？